

官能検査法による味覚調査  
— 青年期における年齢別味覚の相違 —

聖徳大短大部      ○ 伊藤輝子 田中聖子

**目的** ヒトの味覚はどの様に生じ、どの様に変化するのか。これらの点を明らかにする目的で、幼少時から老人迄を対象とし、ヒトの感覚を用いる官能検査法で人間の味覚の変化を追求している。昨年発表した学童期（小学1年から6年迄）に続き、今回は青年期にあたる中学1年から高校3年迄の検査を行なった。

**方法** 千葉県松戸市の中高生（12才から18才）518人（女子）を対象とした。試料は塩味：0.7, 0.9, 1.1%（食塩水溶液）、甘味：4, 8, 12%（砂糖水溶液）、酸味：4, 8, 12%（食酢、1%食塩、10%砂糖混合水溶液）、旨味：0.1, 0.3, 0.5%（MSG、0.8%食塩水溶液）とし、各々試飲してもらい濃度識別官能テスト法の順位法で行なった。解析、検定はケンドールの一致性の係数(W)、正解率、T検定、 $\chi^2$ 検定法によった。

**結果** 塩味のWは0.41~0.50（除く中2）であり、四味中一番高くかつ年齢差も四味中最小であり、塩味は分かりやすい味といえる。甘味のWは中1から高1迄は小学生と同様0.09~0.14と低く一番好きな味であるのにもかかわらず判定能力は低い。高2になると0.26と高くなるが大人の判断能力がそなわるのは意外に遅い味である。酸味のWは0.26~0.35（除く中2）であり、その濃度の判断能力は塩味に次ぐ。年齢間の差もさほど見られない。旨味のWは0.06~0.33であり年齢差を最高に示す味である。中1~中3迄は0.06~0.11であるが高1は0.18、高2は0.20、高3は0.33であり、年齢と共に高くなり経験や学習によって覚える味ということが示唆された。四味とも中学生より高校生が高値を示し、青年前期より後期の方が味覚の判断能力のあることが判った。